

## 「政治思想史」

この講義では、標準的な教科書を用いて欧米における政治思想の歴史を概説します。「a」では古典古代から宗教改革期までを、「b」では17世紀から20世紀までを扱う予定です。特に予備知識は要りませんが、シラバスの指示に従い、テキストの該当箇所を予め読んでおくことを推奨します。

「政治学」の歴史といわないで「政治思想」の歴史と称しているのには理由があります。例えばディヴィッド・イーストンという政治学者は「政治」を「社会に対して様々な価値を権威に基づいて配分すること」(authoritative allocation of values for a society)と定義しています。現代の先進諸国における政治を説明する上では実に巧みな定義だと思いますが、歴史を振り返るならば、人びとが常に政治をそのようなものとして捉えてきたわけではありません。政治についての捉え方(政治観)は時代によって変化してきましたし、更にいえばそうした様々な政治観の背景にはその時代特有の世界や人間についての捉え方(世界観)がありました。

例えば古代の思想家アリストテレスは人間をその本性において「ポリスの動物」であると捉え、政治社会(ポリス)において「善き生」を営む存在だと考えていましたが、初期近代の思想家であるホッブズは「人間は人間に対して狼である」がゆえに、政治社会を成立させるためには無制約の権力(彼はそれを旧約聖書に登場する怪獣になぞらえて「リヴァイアサン」と呼びました)が不可欠だと考えていました。どの時代においても、政治観は世界観と密接に結びついていたのです。

しかも両者の関係は複雑で、例えばキリスト教には「人は人間(の命令)よりも神(の命令)の方に従うべきである」(『使徒行伝』5章)という反体制の政治観と、「人は皆上に立つ(国家の)官憲に服従せねばならない。…官憲に反抗する者は、神の命令に違反する者である」(『ローマ人への手紙』13章)という体制順応の政治観の両方が含まれています。こうした世界観と政治観の複雑な関係を歴史的に理解するためには、両者の結びつきを、整合的なまとまりを持った「政治学」としてではなく、論理と感情が混じり合った「政治思想」として捉えた方が、より深い洞察が得られるのです。